市制施行60周年記念

松原歴史ウォーク

4北西コース

松原市

目　次

4．コース図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2-3
76　多聞院龍昌と更池村惣井戸・・・・・・・・・・・・・・・・・4
77　教通寺の文化遺産・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
78　浄林寺と黄檗宗・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
79　宝泉寺と清水井戸伝承・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
80　布忍寺と十一面観音像・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
81　布忍神社と「布忍八景」扁額・・・・・・・・・・・・・・・・14
82　高木村の円成寺・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
83　高木遺跡の中の北新町大池公園・・・・・・・・・・・・・・・18
84　我堂八幡宮と神宮寺の本尊・・・・・・・・・・・・・・・・・20
85　善正寺と本願寺歴代の名品・・・・・・・・・・・・・・・・・22
86　大阪府内最古級の西川家住宅・・・・・・・・・・・・・・・・24
87　堀の貞正寺を支えた人々・・・・・・・・・・・・・・・・・・26
88　堀に建立された浄念寺・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
89　蓮如上人ゆかりの敬恩寺・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
90　手束太郎源光盛の供養塔・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
91　油上の施福寺と薬師信仰・・・・・・・・・・・・・・・・・・34
92　芝村に創建された安楽寺・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
93　阿麻美許曽神社と渡来人・・・・・・・・・・・・・・・・・・38
94　安明寺の創建・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40
95　最勝寺が勤めた城連寺村門徒・・・・・・・・・・・・・・・・42
96　村領を分断した新大和川・・・・・・・・・・・・・・・・・・44
97　天美車庫に残る大正期煉瓦建物・・・・・・・・・・・・・・・46
98　田坐神社と田井城・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48
99　陽雲寺と 10 世法栄の尽力 ・・・・・・・・・・・・・・・・50
100 福嶋・福島家の善宗寺・・・・・・・・・・・・・・・・・・・52
索引・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・54

※本文の柱下段のナンバーは、広報『松原歴史ウォーク』連載時の番号です

2　市域を国道 309 号線と府道堺・大和高田線 (12 号) を境として、
北東・南東・南西・北西の 4 コースに分けました。

■はトイレのある公共施設です。

76 多聞院龍昌と更池村惣井戸

真言宗僧が掘った井戸　長尾街道沿いの社会事業　　南新町１

長尾街道が西除川を渡る布忍橋西詰 (南新町１丁目) に石組の井戸が保存されています。もともとは、東側の河川敷にありましたが、西除川の改修でいまの新町公民館前に移されたものです。正面に「更池村惣井戸　寛政八丙辰年十二月」とあり、内面には「多聞院龍昌建立之」と刻んでいます。

更池村の多聞院 (南新町１丁目) の龍昌が江戸時代後期の寛政８年 (1796)12 月、村人の共同井戸としてつくったことがわかります。井戸は、堺と大和を結ぶ長尾街道沿いに設けられましたので、往来する人々や荷車をひく牛馬の口も潤したと思われます。

井戸をつくった龍昌が住職をつとめていた多聞院は、長尾街道の南側にあります。現在は単立となっていますが、もともとは真言宗寺院でした。以前は、河内西国４番霊場の札所として信仰されていました。参道には、四国八十八ヵ所や西国三十三ヵ所札所の本尊石仏が、両側に一列に並べられています。

寺伝では、平安時代後期の堀河天皇の寛治３年 (1089)、向井村に布忍寺 (永興寺) を建てた永興律師が開いたとあります。寺号は、堀河天皇勅願の多聞天を安置したことから名づけられました。布忍寺の塔頭でもありました。山門横に「人皇七十三代堀河天皇勅願多聞天王按置」の石碑が建っています。本尊は室町時代の薬師如来像で、当時期の膳や密教法具も残されています。

一時、法灯が絶えますが、江戸時代中期の正徳元年 (1711) ６月の『河州丹北郡更池村寺院取調帳』には、豊臣秀吉時代の文禄３年

(1594) に快恵が中興したとあります。ただ、天明５年 (1785) の多聞院『過去帳』では、元禄 16 年 (1703) に当寺北隣りにある更池村庄屋の田中氏が再興したとも記しています。

井戸を掘った龍昌を知るため、本堂横の墓地を調べてみました。墓地は新しく整備されましたが、北側にまとまって歴代住職の無縫塔が何基か残っており、その中に龍昌の墓がありました。正面に「当寺第五世阿闍梨龍昌」、裏面に「享和二壬戌天二月十日寂　行年四十二歳　遺子龍宗建立」と刻んでいます。

龍昌は５代住職、享和２年 (1802)、42 歳で亡くなったことがわかります。墓を建てた子の龍宗は、のち６代住職となりました。井戸建立時の寛政８年は、４代住職の龍淵が在世していましたが、龍昌が多聞院を代表して社会事業に貢献したようです。

先代の龍淵は、龍昌が亡くなった２年前の寛政 12 年 (1800) ８月、62 歳で亡くなりました。龍昌墓の隣りにその墓が現存しています。やはり龍宗が建立したものです。

江戸時代後半の龍淵・龍昌・龍宗時代は、多聞院が寺観を整えた時期でした。天明５年に、『過去帳』を記して寺史を明らかにしたのも龍淵でした。

更池村惣井戸

77 教通寺の文化遺産

高野・奈良道の川地蔵道標 更池銀行正門を移築　　南新町１

国の登録有形文化財である南新町１丁目の田中家住宅東側に、浄土真宗本願寺派の教通寺が建っています。

江戸時代の教通寺は、更池村庄屋を勤め、檀家であった田中家に残る正徳元年 (1711) ６月の『寺院取締帳』に「西本願寺宗河州南嶋泉村妙教寺下」と見え、京都の西本願寺を本山とする明教寺 (羽曳野市島泉) の末寺でした。この時期、東西・南北各五間 (約９m 四方) の境内にわら葺きで庇瓦の堂だけが建っていました。すでに、延宝８年 (1680) に西本願寺から下された本尊の阿弥陀如来像に裏書があり、この時に教通寺の寺号が与えられたとあります。

その後、延享３年 (1746)11 月の『河州丹北郡更池村明細帳』は、堂以外に庫裏もつくられていたことを記し、いずれも瓦葺きになっていました。現在、本堂には、もともとは廊下であった所に喚鐘が架かっています。そこには「河州丹北郡更池村教通寺」「安永四乙未二月日寄進施工何某」と刻まれ、別面に「寛政九丁巳正月仕替之施工田中氏」「治工大坂西高津町新道住今村喜兵衛清次作」と追刻しています。安永４年 (1775) に鋳造された喚鐘を、田中家８代当主の清一良が寛政９年 (1797) に修復したものでした。

清一良は文化 13 年 (1816) に亡くなりますが、明教寺に対しても、父の了甫 (喜右衛門・安永２年没) と母妙勝 (文化７年没) の名で本堂前に一対の天水を寄進し、いまも雨水が貯められています。「寄進 更池村 田中氏」「田中了甫 妙勝」とあります。

ところで、教通寺は戦前まで本堂と庫裏だけで、山門はありませ

んでした。そこで、いま見られる表門が旧更池銀行から移築されたのです。更池銀行は、明治 29 年 (1896) 3 月に、田中家 12 代当主の清らが発起人となって、現新町公民館の場所に設立し、各地に支店も設けていました。しかし、昭和 17 年 (1942) 3 月に解散し、45 年余の歴史を閉じたのです。更池銀行では、株主総会を教通寺本堂で行っていたこともあり、翌 4 月に同寺で銀行関係物故者の慰霊祭もとり行いました。そして、銀行正門は教通寺山門として生まれかわったのでした。

なお、山門北側には教通寺同行会によって「川地蔵」が祀られています。和泉砂岩でつくられ、舟形光背の上部が斜めに欠けた地蔵菩薩立像です。光背には向かって右側に「旭童女 享保十三戌申正月十三日」、左側に「是南かうや道 東なら婦じい寺」と刻んでいます。

刻銘からもわかるように、享保 13 年 (1728) に下高野街道と長尾街道が交わる西除川の布忍橋北西詰に建てられた地蔵を形どった道標でした。南に向かえば高野山 (和歌山県)、東へ行けば葛井寺 (藤井寺市) や奈良に至りました。近代に入り、長尾街道の拡幅などによって同所にあった天保 3 年 (1832) の布忍橋標石と共に移転されたものです。

教通寺

78 浄林寺と黄檗宗

慧極と龍統の黄檗宗高僧が再興した古刹　　南新町５

江戸時代前期、中国・明僧の隠元によって禅宗の一派である黄檗宗がわが国に伝えられました。本山は、京都府宇治市の黄檗山万福寺です。黄檗宗寺院は中国の儀式や様式を受け継ぎ、万福寺の歴代住職の多くは中国僧でした。

この黄檗宗寺院が市域にも１ヵ寺、いまも法灯を掲げています。それが南新町５丁目、江戸時代は丹北郡清水村であった長尾街道の南側に建つ清水山浄林寺です。長尾街道をはさんで北側に建つ、おなじ清水の融通念仏宗である宝泉寺の山号も、同じく清水山です。

浄林寺は、もともとは真言宗でしたが、一時荒廃したため、元禄11年(1698)に住職の瑞光が黄檗宗に改宗して、万福寺末となりました。しかし、再び寺運が衰えてきたため、享保２年(1717)になって慧極と龍統という、当時の黄檗宗の高僧が浄林寺の再興にたちあがったのです。

慧極は小田氏で、長州国萩(山口県)の出身です。長州藩主毛利氏に仕える武家でしたが、万福寺に入り、隠元なきあと、黄檗三傑の１人と称されました。寛文12年(1672)、河内国丹南郡今井村(堺市美原区今井)に法雲寺を興し、以後50年にわたり、同寺を中心に各地で教えを広めたのです。その間、毛利氏の菩提寺として萩に東光寺も開きました。

龍統は志方氏で、大坂に生まれました。慧極の弟子として、修行をつみました。享保２年、龍統は荒廃していた浄林寺の復興を願い、慧極を請じて浄林寺開山と仰ぎ、みずからは２代住職となったので

す。このため、浄林寺は、これまでの万福寺末から法雲寺を上寺（うわでら）とするようになりました。

この時、慧極 86 歳、龍統 55 歳でした。慧極の筆になる「浄林寺」の寺額が浄林寺本堂正面に掲げられています。慧極は詩偈・書・絵にもすぐれ、多くの遺品が残っていますが、そのうちの 1 つが、「浄林寺」額なのです。

慧極は浄林寺を再興して 5 年後、享保 6 年 (1721)、90 歳で亡くなりました。その墓石が法雲寺にいまも残っています。一方、龍統はその後、萩の東光寺 6 世となり、さらに元文（げんぶん）5 年 (1740) には、万福寺の 14 世となりました。万福寺住職は初代の隠元以来、13 世まで中国僧でしたが、龍統はこの先例をやぶり、日本人としてはじめて住職に任じられた人でした。

現在の浄林寺は、本堂と庫裏（くり）が 1 つとなった民家風の古建築で、本尊は地蔵菩薩像です。もともと黄檗宗は臨済禅（りんざいぜん）を継承して、江戸時代は臨済正宗と称していましたので、本堂に祀られる歴代住職の位牌には「臨済」の名が記されています。また、本堂の南側にそびえるクスの大木の下に、歴代住職の石塔や戦国時代の石仏・一石五輪塔が見られます。

浄林寺

79 宝泉寺と清水井戸伝承

清水の地名起源となる井戸と大坂城の巨石　　南新町６

長尾街道に面する布忍の南新町５丁目および６丁目や北新町６丁目あたりは清水遺跡とよぶ古墳時代から近世にかけての集落遺跡です。同地は、布忍地域が昭和 48 年 (1973) に新町という新住居表示になる前、清水村 (町) とよばれていました。

清水という地名は、わが国に多く見られますが、その地名起源は一般的には、清い水や泉がわき出ていたので、命名されたものが多いようです。本市の清水にも、南新町６丁目の長尾街道北側、清水公民館近くにある融通念仏宗の清水山宝泉寺の境内に清水井戸があったということです。そして、清水がこんこんとわき出ていたと伝承されています。この清水井戸については、次のような興味深い話が伝えられています。

天下人を目指した豊臣秀吉が大坂城を築くにあたり、その石垣の構築のために各地から巨石を集めさせました。この時、清水にも石垣に使えそうな巨石がありました。村人たちはこの石を秀吉に差し出すかどうか迷いましたが、巨石を村人総出で大坂まで運搬すれば、労力もかかり大変なので、役人に見つかる前に隠すことにしました。その場所として、宝泉寺境内の清水井戸が選ばれました。村人たちは清水井戸の蓋石として、それを覆いかぶせてしまったというのです。

宝泉寺の山号を清水山と称するのも、この清水井戸にちなんでいるといわれています。現在、宝泉寺には清水井戸と思われる井戸は存在しませんが、宝泉寺は鎌倉末期に開創されたと伝えています。

融通念仏宗の総本山である大念仏寺 (大阪市平野区) の７世と

なって各地に宗法を広げていた法明が、元亨３年 (1323) に念仏勧進道場として、清水に宝泉寺を創建しました。この時、法明は宝泉寺本堂に現本尊として祀られている阿弥陀如来座像を安置したといわれています。ただ、戦国時代の明徳２年 (1391) ９月 28 日付の大和・『西大寺末寺帳』に「布忍宝泉寺」の記述が見られます。この布忍の宝泉寺が、現宝泉寺と同じであれば、宝泉寺がこの時期、南都七大寺の１つであった奈良市の西大寺の末寺であった可能性もあり、真言律宗との関係もうかがえます。

宝泉寺はのち江戸時代を通じ、大正末年まで、大念仏寺に次ぐ中本山であった本市丹南の来迎寺を上寺とあおぎ、本末関係を持っていました。

清水井戸の伝承は、史実かどうか確かではありません。清水という地名起源からおこった伝説とも考えられます。しかし、清水遺跡からは室町時代の井戸跡が検出されています。また、近くの南新町遺跡では平安時代の井戸跡が見つかり、北新町の布忍遺跡や高木遺跡でも鎌倉時代から室町時代にかけての井戸跡が出土しました。伝説の清水井戸が考古学的に検証される日も近いかもしれません。

宝泉寺

80 布忍寺と十一面観音像

融通念仏宗大林寺に移された本尊　北新町 1

布忍神社前の西除川に架かる宮橋東詰に、布忍山大林寺 (向井村、北新町 1 丁目) があります。融通念仏宗で、河内西国第 5 番霊場として信仰されています。明治初期までは、堺市美原区大饗にありました。

本堂には、本尊の阿弥陀如来像と並んで、等身大の十一面観音像が厨子の中に祀られています。十一面観音像はヒノキの一木造で、高さ 170cm を測ります。光背・台座や十一面の頭上面・両手先・両足先は後世の補修ですが、そのほかは当初のままです。平安時代後半の 11 世紀ごろの作で、松原市指定有形文化財に指定されています。

十一面観音は、平安時代後半に向井に建てられていた布忍寺の本尊でした。永興律師の創建と伝え、永興寺ともよびます。松原市史編さん室『河内国布忍寺の調査研究』(昭和 58 年) は、「目鼻から口もとにかけての面貌の彫りは浅く、いたって穏やかな表情となっている。面奥の深い割りに頬の張りは少ない。…府内でも古像に属し、作柄も畿内作品としてしっかりしている。これが旧布忍寺の本尊であれば、かなり寺観の整った大寺と思われる」と述べています。

布忍寺の寺伝によれば、同寺は七堂伽藍を備えた大寺であったと伝えています。この本尊の大きさや作風の立派さから、そのことが立証されるかもしれません。鎌倉時代の文暦元年 (1234)12 月 18 日に、平氏より「河内国布忍寺奉懸鐘」(東大寺鋳物師の草部信明作) が寄進されていますので、有力檀越の関わりも想定されます。松原市役所入口の市民プラザに模倣品ですが、布忍寺鐘が架けられています。

布忍寺は、布忍神社西南すぐの北新町 2 丁目にありましたが、明

治６年 (1873) に廃寺となりました。いまでは宅地化されて、その跡は定かではありません。松原市史編さん室は、昭和 54 年に寺跡の一部を試掘調査したところ、平安時代後期の軒丸瓦・軒平瓦や柱穴などが検出されました。平安時代後期に布忍寺が建立されると同時に、十一面観音も製作され、本尊として祀られたのでしょう。

しかし、明治初年の廃仏毀釈に際し、十一面観音は持ち出されて、その他の什物と共に、近くの大林寺に安置されたのでした。

十一面観音は、もともとは漆箔像と思われますが、いまでは剥落して素地を露出しています。このため、調査書では「ある長い時期、風雨にさらされることがあったのではないか」と想像しています。

布忍寺は、南北朝時代や戦国時代に兵火にかかり衰退した時期がありました。江戸時代の元禄３年 (1690) に本堂 (観音堂) が再建されるまで、堂塔は荒れはてていたのです。

十一面観音が安置されていた布忍寺本堂は、廃寺後、明治 20 年 (1887) に柏原市法善寺の融通念仏宗の壺井寺本堂として移され、現存しています。

また、布忍寺の名も塔頭であった高木 (北新町３丁目) の東之坊が受け継ぎ、大林寺ともどもその歴史を伝えています。

大林寺と十一面観音像

81 布忍神社と「布忍八景」扁額

神仏混淆の一間社流造と文人が詠んだ布忍の名勝　　北新町２

布忍・北新町２丁目 (向井村) に鎮座する布忍神社本殿は大阪府指定有形文化財に指定されています。同時に、建立時と思われる寛文３年 (1662) ５月９日に、近くの氏子である清水村 (南新町) の庄屋・木下氏が武運長久や無病息災を祈って奉納した木札も府文化財です。境内は西除川に接し、クス・クロガネモチなどの巨木が茂っています。

布忍の地名の由来は、布忍神社の社記によると、平安時代初期、同社の北 18 町 (2km) に鎮座する阿麻美許曽神社の祭神である素盞嗚命を白い布を敷いて忍んだ姿で迎えたので、社名を布忍と名付け、鎮座地を向井と称したと伝えています。

同社は素盞嗚命・八重事代主之尊・武甕槌之尊を祭神とします。新町地区の向井・清水・高木・更池・東代と天美地区の堀の氏神社です。江戸時代、布忍寺の鎮守社の性格を持っていたようです。本殿は江戸時代初期の一間社流造、檜皮葺きの様式です。身舎の木鼻・肘木や蟇股は豪華で力強く、前代の桃山様式を受け継いでいます。なかでも珍しいのは、蟇股に祭神の素盞嗚命をあらわす仏教で見られる梵字がはめられていることです。神仏混淆の形式をとどめているのでしょう。

仏教との関わりでいえば、本殿の正面に「布忍宮」と書かれた扁額が掲げられていますが、これは黄檗宗本山の万福寺５世、高泉性潡の筆になるものです。高泉は中国・明から招かれた高僧で、元禄５年 (1692) に万福寺 (京都府宇治市) の住職となりました。

また、本殿身舎の両側面に描かれている唐獅子や脇障子の随神像は、江戸時代初期に本殿が建てられたとき、幕府の御用絵師であっ

た狩野探幽が描いたと伝えられています。

　ところで、神社周辺は「布忍八景」とよばれる景観が選定され、布忍の名勝を絵と漢詩・狂歌・俳句であらわし、扁額として布忍神社に奉納されました。宝永２年(1705)11 月 13 日と記され、拝殿に掲げられ、松原市指定有形文化財となっています。扁額は１枚に二景が収められ、４枚で一組でした。ケヤキの板で、各枚 200cm × 50cm ほどを測ります。八景は、宮裏白櫻、孤村夕照、野塘春日、平田秋月、南山残雪、西海晩望、竹林黄雀、篭池白鴎が選ばれました。本殿のまわりに桜が咲きほこり、東に金剛山や二上山、西に大阪湾が遠望されます。北東側の籠池にはカモメが羽を休めています。

　八景扁額は、板の裏に書かれた名前によって 27 人もの願主がいたことがわかります。布忍神社を氏神とする高木・更池・東代・清水・向井・堀の各村々の庄屋・年寄クラスの富農たちが 21 名を占め、ほかにも松原村や現堺市域の南花田村・小坂村・北村の人も見られます。高木の布忍寺東之坊や更池の多聞院の僧侶もいました。さらに、当時の大坂の高名な歌学者の下河辺長流や国学者の契沖、あるいは俳人の小西来山と考えられる作品が「宮裏白櫻」に見られることも八景扁額の価値を高めています。

布忍神社

82 高木村の円成寺

堺・聞蔵寺を上寺とする浄土真宗本願寺派　　北新町５

布忍・北新町大池公園の西南側に、西本願寺を本山とする浄土真宗本願寺派の実性山円成寺 (北新町５丁目) が建っています。江戸時代、丹北郡高木村の地でした。宝暦９年 (1759) ６月の『河州丹北郡高木村明細帳』には、高木村には円成寺のほか、真言宗の東之坊 (現布忍寺) と融通念仏宗の法伝寺 (廃寺) の３ヵ寺を記しています。

円成寺は、江戸時代、円城寺と表記されることもありましたが、今は円成寺で統一しています。本堂中央の宮殿に祀られる阿弥陀如来像の左側背面に「聞蔵寺門徒　河州丹北郡羽喰庄布忍高木村惣道場圓城寺」と書かれています。さらに、台座に差し込まれた本尊の足元のホゾ木にも「河州高木村惣道場　圓成寺」とあり、その横には仏像作者の「康雲」の文字も見られます。江戸時代前半の阿弥陀如来像と考えられます。作者の康雲は姓は渡辺氏で、京都の岡崎 (左京区) に住んだ西本願寺おかかえの仏師でした。各地の西本願寺の末寺の仏像を造っており、市域では松原村上田のうち、反正山村の善法寺 (廃寺) の阿弥陀如来像にもその名が刻まれていました。

これらの銘文からわかったことは、

(一) 羽喰庄は三宅村や田井城村などでも使われていますが、布忍の高木村も庄内であったことです。中世、高木は高木庄の中でしたが、江戸時代に入って、羽喰庄に統轄されていったようです。

(二) 次に、円成寺は聞蔵寺の直末で、西本願寺を本山としますが、直接的には聞蔵寺が上寺であったことです。聞蔵寺は堺の神明町東 (堺区) にあり、本願寺堺別院表門の前に建っています。无碍

山と号し、慶長15年(1610)、常春の開基と伝えています。創建当初は浄照坊と称していました。同じ西本願寺末寺で、隣接する覚応寺の河野鉄南住職(与謝野晶子を与謝野鉄幹に紹介し、歌人としても有名)の弟が明治時代に聞蔵寺に入寺しています。

寛政4年(1792)ごろにまとめられた西本願寺蔵の『河内国末寺帳』に「堺聞蔵寺下高木村　円成寺」と記しており、円成寺門徒が聞蔵寺を上寺として、本山へ取り次ぎが行われたと思われます。

阿弥陀如来像の横には、厨子が置かれています。そこには、「文化七庚午七月晦日　法名釋尼妙圓」「願主　大坂谷町四丁目裼屋町河内屋九郎兵衛」や「文化七庚午八月　河州丹北郡　世話人圓城寺」と書かれています。文化7年(1810)7月、大坂の谷町4丁目(大阪市中央区)に住む河内屋九郎兵衛が、亡くなった妙圓という女性のために寄進した厨子で、翌8月、円成寺がお世話しました。

また、『過去帳』が、幕末の弘化4年(1847)8月に「高木村圓成寺　什物」としてまとめられました。その筆頭に寛永9年(1632)7月4日の檀家さんの法名が見られますので、江戸時代前半には高木村の惣道場として、寺観が整っていったのでしょう。

円成寺

83 高木遺跡の中の北新町大池公園

弥生時代・奈良時代の集落 江戸時代の灌漑池　　北新町３

北新町３丁目にため池を活かした北新町大池公園がつくられています。大池の北側は以前のままの水域空間を残し、木橋やあづまやを設けて、水鳥や水生植物が間近に観察できます。一方、南側は埋め立てられて緑の芝が張りつめられ、花壇もつくられました。大型複合遊具や健康遊具も設置され、多くの人々が楽しんでいます。

江戸時代、この地は丹北郡高木村で、村には豊かな水をたたえる大きな池がありました。その池は、くわ池とよばれていましたが、のちいまのように大池と名を変えたのです。

江戸時代中ごろの宝暦９年 (1759) ６月の『河州丹北郡高木村明細帳』の中に、「字くわ池　溜池壱ヶ所　池床壱町四反余」とあります。高木村には、くわ池というため池が１ヵ所あることがわかります。池敷面積は 1.20ha ほどでした。

その後の高木村の史料を見ますと、文政年間 (1818 ～ 29) ごろまでに新池の名が出てきます。これは、くわ池 (大池) の南に道をはさんで見られた新池 (池敷面積 0.3ha) のことです。江戸時代後半になって、高木村では米の生産量が増え、くわ池だけの水では田畑の灌漑用水が足りなくなり、新しく池を隣接してつくったのでしょう。いまでは、新池も埋め立てられ、「おおいけ市民緑地」となっています。

江戸時代幕末の文久３年 (1863) ５月に記された高木村の『御用留』という史料には、「村方溜池用水弐ヶ所御座候」とあります。高木村では、くわ池と新池という２つのため池があったのですが、近代に入ってそれでも水が足らなかったのか、さらに大池と新池の

すぐ西側に皿池がつくられました。その皿池もすでに埋められ、高木町公民館が建っています。

高木東部を流れる西除川から取水して、３つの池が並ぶあたりは、古くから集落が形成され、田畑が耕されていた地域でした。皿池の高木町公民館西側では、いまから 1700 ～ 1800 年ほど前の弥生時代後期の土器と共に、たて穴住居や井戸址が検出されています。高木遺跡と名づけられています。

平成 20 年 (2008) には、大阪府都市計画道路堺港－大堀線の延伸工事に伴い、ため池の北西部にあたる高木の北新町４丁目で弥生時代後期の円形と方形のたて穴住居が１棟ずつ確認されました。弥生土器の甕や鉢などが多く出土しましたが、内陸部では珍しく、海水を入れて塩作りに使う製塩土器も見つかっています。

同地からは、奈良時代の条里制 (土地を東西・南北の線で碁盤目状に分ける) の里境の畦と溝や、1200 年前の奈良時代後期から平安時代前期の 12 棟もの掘立柱建物も見つかりました。建物からは海獣葡萄鏡とよぶ貴重な銅鏡や硯、および井戸址からは銅銭の「富寿神宝」(弘仁 9 年 (818) 初鋳) も出土しており、役人が執務していたのかもしれません。

北新町大池公園

84 我堂八幡宮と神宮寺の本尊

南北朝時代・北朝年号の阿弥陀仏　　天美我堂４

天美我堂４丁目に厄除宮として有名な我堂八幡宮があります。江戸時代の延宝８年 (1680) の「我堂村検地絵図」では社名がなく、鳥居のしるしだけです。のち、延享元年 (1744) の『両我堂村明細帳』には「十五社明神」、享和２年 (1802) の『東我堂村明細書上帳』にも「氏神十五社神」と記されていくようになります。

明治初年に八幡神社と称した後、大正２年 (1913) に産土神社と改めましたが、いまでは我堂八幡宮の名で信仰されています。布忍神社・屯倉神社・柴籬神社・阿保神社・阿麻美許曽神社と共に松原６社参りの１社です。毎年２月３日の節分に行われる古式にのっとった湯立神楽は伝統行事になっています。

京都の石清水八幡宮 (八幡市) の分霊を勧請したと伝え、品陀別命 (応神天皇) が祭神です。境内西鳥居を入ったところには、江戸時代から昭和初期にかけて若者が力競べをした力石が残っています。石の表面には「力石」・「八幡石」・「明治石」・「龍王石」・「金剛石」と刻まれており、貴重な民俗資料といえるでしょう。いずれも同じ形状ですので、「明治石」から明治時代のものと思われます。

江戸時代まで、境内には黄檗宗の神宮寺があり、社僧が奉仕していました。宇治 (京都府) の万福寺の末寺でした。現在の八幡宮は昭和 53 年 (1978) の再建ですが、それまで旧社務所には神宮寺の仏間が残されていました。神仏習合の信仰が息づいていたのです。

神宮寺は、明治初年の廃仏毀釈で廃寺となり、その仏像や什物は他所に移されました。このうち、本尊であった阿弥陀如来座像は近

くの天美我堂７丁目の善正寺 (真宗大谷派) に納められたのです。

善正寺の本尊は、鎌倉時代の阿弥陀如来立像です。その左側に、旧神宮寺本尊の阿弥陀如来座像が客仏として安置されています。像高は 61.5cm で、作風は中国・宋風の影響をうけており、像裏に次のような墨書があります。

本尊　阿弥陀如来　　神宮寺置之　　永和三丁巳年
施主　成田誓玄居士

墨書から、成田氏が永和３年 (1377) に神宮寺の本尊として、阿弥陀如来像を寄進したとあります。「永和」は、南北朝動乱期の足利氏による北朝の年号です。室町幕府の３代将軍足利義満が京都・室町に「花の御所」を造営したのは、その前年の永和２年でした。

南朝ではなく、北朝年号を使っている理由の１つは、同じ松原市域に鎌倉末期、幕府の守護所が丹南に置かれると共に、北朝の丹下氏が西大塚の河内大塚山古墳 (丹下城) や岡 (松原城・剰我城) に城郭を築いて勢力をもっていたからでしょうか。ただし、本像は江戸時代の作風とも考えられており、墨書は追記だとする考えもあります。

我堂という地名の由来は、この神宮寺に拠っているかもしれません。

我堂八幡宮

85 善正寺と本願寺歴代の名品

蓮如・顕如・教如上人にかかわる名号・絵像　　天美我堂７

堺市北区北花田に接する天美我堂７丁目に天見山善正寺があります。同寺は、古くは摂津国平野 (大阪市平野区) にあって、金剛乗院とよばれた真言宗でした。現在、山門の南側には我堂公民館や松原第五中学校が建っていますが、もともとは前ヶ池が水をたたえていました。

戦国時代の明応年間 (1492~1500) に浄土真宗中興の祖といわれる本願寺８世の蓮如の布教のおり、三好順慶の子の了道が帰依して、浄土真宗に転宗しました。それを機会として、城連寺村 (天美北) の現在、最勝寺のある地に移りました。

さらに、文禄２年 (1593) に住職の順欽が本願寺 12 世で、東本願寺を創始した教如に帰依し、善正寺と改称した後、江戸時代の元和２年 (1616) に砂村 (天美西の芝・油上地区) に移りました。その後、寛永 18 年 (1641) になって、現在地の我堂村に移転したのです。いまも、歴代住職は三好氏が継いでおられます。

善正寺には、戦国時代の本願寺歴代の貴重な品々がいくつか所蔵されていますので、次にそれらをあげてみましょう。

(一)「六字名号」　蓮如は宗祖親鸞が名号を本尊としたことから、木像や絵像よりも名号を重視しました。善正寺蔵の「南無阿弥陀仏」の六字名号 (草書体) は、蓮如直筆と伝えており、親鸞の教えを守って、蓮如が書写して門徒の人々に与えたと思われます。

(二)「親鸞・蓮如連座像」　蓮如が親鸞の法流を継承する立場にいることを主張する目的でつくられたものです。上に親鸞、下に蓮如を描いた座像で、遺存例があまりなく、寛正２年 (1461) から

文明(ぶんめい)８年 (1476) ごろの作と思われます。

(三)「顕如(けんにょ)絵像」　本願寺 11 世顕如の絵像は、裏書を欠していますが、記録では文禄２年正月 28 日付の長男の教如裏書があったといいます。顕如は文禄元年 (1592)11 月 24 日に没していますから、本絵像はその死後まもなく制作されたもので、顕如絵像としては最も古い時期の作品と見られます。

(四)「本願寺歴代連座銘」　16 世紀末ごろの作品で、親鸞から始まる本願寺の歴代を記したものです。最終が教如となっていることやその筆致から教如直筆と思われます。教如は文禄２年の本願寺継職後まもなく、豊臣秀吉によって隠退を余儀なくされますが、この連座銘では、自身が本願寺の正統な継職者であることを主張しているのでしょう。

これらの所蔵品は、真宗教団における河内の門徒の信仰を示すものです。 善正寺では、毎年 10 月に行われる報恩講(ほうおんこう)の時、一般の人々にも公開しています。なお、本堂に掲かる山号「天見山」の扁額(へんがく)は、我堂村領主であった狭山(さやま)藩主北条氏の書になるものです。現在の天美は、江戸時代までは天見と書いたようです。「天見郷」と記す史料も多く見られます。

善正寺

86 大阪府内最古級の西川家住宅

17 世紀中ごろ以前建築の西我堂村庄屋　　天美我堂 7

江戸時代の天美我堂は、現在の天美我堂７丁目の真宗大谷派・善正寺の東側を流れる水路 (いまは暗渠となり、道路が走る) によって、東側が東我堂村、西側が西我堂村に分かれていました。明治８年 (1875)、両村は合併して我堂村となりましたが、西我堂村の庄屋をつとめていたのが西川家でした。ちなみに、東我堂村の庄屋は、我堂八幡宮の東側にある山口家でした。

江戸時代には、いまの大字にあたる各村ごとに庄屋が任命されていて、お上の命令を伝えたり、下の願い事をとりついだり、年貢米の取り立てなどを行っていました。封建政治の下部機関として大切な役でしたので、家柄のよい富裕な家がその役を持たされました。

善正寺の北側に、広大な屋敷地を構える西川家住宅は、大阪府内でも現存最古級の民家の１つとして知られています。松原市は、昭和 52 年 (1977) と 53 年にわたって、市内で 100 年以上経ていると推定される約 100 棟の民家の悉皆調査を行いました。

西川家は、過去に大阪府によって調査されていましたが、その主屋は江戸時代初期の 17 世紀中ごろ以前という古い時期に建てられたことが、あらためて確認されました。

大和や河内地方の富裕な農家では、大和棟といって主屋に茅葺きの急勾配の大屋根をあげ、その両端に登り高塀をあげて、その上に瓦をのせたのですが、西川家もその好例です。

もっとも、古い家ほど何度も改造されたり、改築されたりして、築造当初の原形がかなりくずされています。西川家でも、土間の下手

は後補材です。しかし、居室部分は築造当時の部材がよく残っており、仏間が独立した五間取り住宅として、非常に古い形式を示しています。

とくに、納戸(物置)の入口には、敷居を一段高くして、またいで入る「踏み込み」があったり、あるいは、居室の外側の柱が一間ごとに並んで、それぞれ両袖に片壁を持ち、その裏に板戸と明り障子を引き入れるという、河内の民家の中でも最古の手法が用いられています。

また、屋敷の裏(北側)には、橋が架けられた幅8mほどの周濠が見られますが、これは屋敷の南側にあった前ヶ池(埋め立てられ、松原第五中学校や我堂公民館となる)や東西の水路に囲まれた環濠集落のなごりでしょう。

ところで、我堂にほど近い羽曳野市島泉には、吉村家住宅があります。同家は、元和元年(1615)の兵火後すぐの建築と考えられ、昭和12年(1937)、民家として国内で初めて国宝(現重要文化財)に指定されたことで有名です。

西川家は、吉村家と時期的にも近く、間取りもきわめて類似した所が多くあります。むしろ、居室部分は吉村家よりもよく残っているとさえいわれています。

西川家住宅　※非公開です

87 堀の貞正寺を支えた人々

句仏の親鸞聖人を讃える句碑を建立―真宗大谷派　　天美南４

宝暦９年 (1759)、現在の天美南の丹北郡堀村は、これまでの幕府領から丹南 (本市丹南) に陣屋をおく丹南藩高木氏の領地となりました。このため、同年５月、庄屋五郎左衛門らは藩に『堀村差出明細帳』を提出しました。

『明細帳』には、道場として浄土真宗の貞正寺と大念仏 (融通念仏宗) の浄念寺の２ヵ寺があり、それぞれ僧侶が１人ずついると記されています。また無住ですが、浄求庵と浄信庵も建っていました。

このうち、貞正寺は東本願寺を本山とする真宗大谷派で、大徳山と号します。寺伝によると、寛文２年 (1662)、宝憧によって開基されています。ただし、『大阪府全志』(大正 11 年) では、寛文９年 (1669) に法道が開いたとする別伝を記載しています。本堂に祀られる本尊の阿弥陀如来立像の背面に「河州丹北郡堀村惣道場　貞正寺」と記されていますが、惣道場として、寺観が整っていった寛文年間以後に東本願寺から下されたのでしょう。

現本堂は平成９年 (1997) に新築されたのですが、旧本堂を解体したおり、棟札が発見されました。棟札によると、幕末の天保 11 年 (1840) ２月に旧本堂が建てられ、普請奉行として、堀村の檀家である芝野覚助と芝野新左衛門があたりました。その時の棟梁大工には、松原村の澤田伊兵衛と清水村 (本市南新町) の小橋儀兵衛の名が見られます。

普請奉行の１人、芝野新左衛門は、本堂に吊られている喚鐘 (半鐘) にもその名前が記されています。池の間と称する区画に「河内

国丹北郡堀邑貞正寺什物　干時文政二年己卯三月吉日施主芝野新左衛門」と刻んでいます。本堂再建の 21 年前の文政 2 年 (1819) に、新左衛門が法会などで用いる鐘を寄進したのでした。

芝野家は貞正寺の北側に位置し、堀村の庄屋をつとめていました。堀村の名は、芝野家の北端に掘られていた溝から付けられたと伝承されています。その溝はすでに埋められ、いまでは児童公園になっています。天美南 4 丁目や 5 丁目のあたりは、字地でも堀とよばれているところです。

貞正寺山門を入った右側に句碑が建っています。「大徳山貞正寺伽藍再建記念碑　平成九年九月吉日」とある石碑に「勿体なや祖師ハ紙衣の九十年　句仏」と刻まれています。

この俳句は、東本願寺 23 世の大谷光演 (彰如上人、明治 8 ～昭和 18 年) がつくったものです。彰如は俳人としても名高く、句仏と号しました。句仏とは、「句をもって、仏事をなす」の意です。

祖師の宗祖親鸞聖人が防寒着として着ていた紙衣という粗末な衣服をもって、90 年の生涯を全うしたことを讃えると共に、豊かな時代に暮らしている自らを戒めています。前住職が句仏に心酔して建立したものです。

貞正寺

88 堀に建立された浄念寺

大念仏堀同行が信仰する融通念仏宗　　天美南４

天美南４丁目の堀地区で、堺ー大堀線の府道延伸工事によって、８世紀後半の奈良時代の水田が見つかりました。また、当時の人々の足跡のほか、荷車の車輪がめりこんだ轍(わだち)も残っていました。この時期の住居や倉庫と考えられる５棟の建物も検出されています (堀遺跡)。

その後、丹北(たんぽく)郡堀村となった江戸時代の集落は、河内天美駅前の天美商店街を南に下った地域に形成され、水田や畠も増えていきました。商店街から南へ行くと、現在はフェンスで囲まれていますが、その堀遺跡を越えた、貞正寺(ていしょうじ) (真宗大谷派) の南西側に、大念仏堀同行(だいねんぶつほりどうぎょう)が建てた浄念寺(じょうねんじ)跡の石碑と新しい堀浄念庵の建物が見られます。

堀村には、かつて浄念寺と称する融通念仏宗(ゆうづうねんぶつ)寺院がありました。融通念仏宗の総本山である大念仏寺 (大阪市平野区) による延宝(えんぽう)５年 (1677) ６月の『大念仏寺四十五代記録并(ならびに)末寺帳』に、浄念寺は慶長(けいちょう)18 年 (1613) に堀村檀那(だんな) (檀家) によって創建されたとあります。

創建時の住職は分かりませんが、融通念仏宗の中本山である来迎寺(らいごうじ) (本市丹南(たんなん)) の寛文(かんぶん)６年 (1666)10 月の『河州(かしゅう)丹南郡丹南村来迎寺末寺御改帳(あらためちょう)』には、末寺として浄念寺があり、秀道(しゅうどう)の名が見られます。秀道は、『大念仏寺末寺帳』によれば、万治(まんじ)３年 (1660) に浄土宗から融通念仏宗に帰依したと書かれています。

浄念寺は近代に入って、廃寺となりましたが、いまも江戸時代以来の大念仏堀同行で結ばれた 34 軒の檀家によって、信仰が受け継がれています。寺跡に新しく浄念庵が建ち、本尊の阿弥陀如来立像や弘法大師(こうぼうだいし)像をはじめ、阿弥陀如来絵像や多聞天(たもんてん)絵像が祀られてい

ます。

このうち、阿弥陀如来絵像は傷みが激しいですが、裏書に「河州布忍堀邑浄念寺什物　修補之願主看坊佐入　元文二丁巳季冬十五日」と記されています。堀はいまでこそ天美地区となっていますが、もともとは布忍地域であることがわかります。

元文２年 (1737) に絵像が修理されたのですが、13 年後の寛延３年 (1750) には、喚鐘も寺の什物となりました。喚鐘の２つの区画に「寛延三年午十一月十三日　河州丹北郡堀村浄念寺什物　施主浄成敬白」と「三誉心月比丘尼　清法寿光」と刻んでいます。

住職と思われる浄成と共に、三誉心月比丘尼の名前があることと、同庵に現存する読経の際に打ち鳴らす鑿にも「十七日尼講　堀村浄念寺」と刻まれていることから、女性の信仰も強かったことがわかります。

寺跡には「道明上人」と刻まれた墓石も祀られており、「□文十二年」の年号が読みとれます。年号は寛文と推測され、1672 年のことで、秀道の時期とほぼ同じですので、秀道が建てた墓かもしれません。

墓の横には、半跏座像の延命地蔵尊が祀られ、台石に文化六己巳年 (1809) 六月吉祥日と刻まれています。毎年８月、堀の地蔵盆がここで行われます。

浄念寺跡に建つ堀浄念庵

89 蓮如上人ゆかりの敬恩寺

本堂内陣を蓮や鳥 花木で飾り極楽浄土を現出　　天美東８

河内天美駅北の線路沿い西側に、浄土真宗本願寺派の敬恩寺 (天美東８丁目、丹北郡池内村) が建っています。山号を吉井山といい、清風院という院号も持ちます。南側には、檀家であった池内村の庄屋・嶋田家があり、明治期の同宅は国の登録有形文化財となっています。

お寺に 15 枚に及ぶ『由緒誌手控』と題した文書が残っています。江戸時代後期の文政５年 (1822) 正月に書かれました。寺の縁起や伽藍の様子、所在地の池内村の現状、檀家の数、親戚などを記したものです。それによると、同寺は戦国時代の文明年間 (1469 ～ 87)、本願寺８世の蓮如が当地方を布教して開いたとしています。文政５年から 334 年前とありますので、文明 18 年 (1486) ごろのことでしょう。

本堂は九間四面で、ケヤキとトガを使い、床の板にはサクラを用いました。とくに、ケヤキの柱は太くて重厚感を持っています。本堂は明和４年 (1767) ３月に再建されたもので、本尊の阿弥陀如来像は、本堂建立時に近い宝暦 11 年 (1761) ごろに祀られました。

本尊を祀る内陣には、彫刻に色彩やかに描かれた鸚鵡・白鵠・孔雀・迦陵・頻伽などの鳥が浄土の世界を飛びかっています。また、牡丹・藤・菊・菖蒲・紅葉・南天・蓮などの花や木も見られ、極彩色を見事に残しています。極楽浄土を願い、石や貝など変色しづらい材料を砕いて絵の具としたのです。本尊をはさんだ正面には親鸞聖人、蓮如上人、聖徳太子、七高祖の各絵像も掛けられています。

境内で興味深いのは、山門が本堂の正面になく、やや南に位置していることです。山門は、いまから 150 年ほど前の幕末に建てら

れました。なぜ正面でないかというと、本堂前に「蓮如上人お手植の松」と伝える古木がたっていたからです。『由緒誌手控』に、松は俗に「蝋燭松」といい、ローソクの形に似て南河内で誰１人として知らない者がいないほど有名であったと記しています。この名木をさけるため、山門をずらせ斜めに本堂に向かうようにしたのです。黒松は遠くからもよく見え、池内の人々は村のシンボルとしていましたが、昭和９年 (1934) の室戸台風で倒れ、枯れてしまいました。

入口に池内村の若中 (若者) が安政２年 (1855) ５月に寄進した「清浄」と書かれた手洗石があり、高さ 20cm の石台が見られます。参拝者はこの台に足をのせ、汚れを落として本堂に上がりました。

その横、菩提樹の下に、句碑が見られます。「越えし山 行く手の山も霞かな　秋窓」とあり、昭和 59 年 (1984) ３月に俳画結社の白扇社が建てたものです。秋窓の姓は芦田。名は喜三郎。秋双とも号します。明治 16 年 (1883)、現在の大阪市中央区平野町で生まれました。14 歳で正岡子規の門に入り、大阪俳壇の重鎮として活躍し、白扇社を興し、現代俳画の祖といわれています。敬恩寺に秋窓が逗留していたこともあり、寺には秋窓の作品が屏風・襖絵・短冊として数多く所蔵されています。

敬恩寺

90 手束太郎源光盛の供養塔

『平家物語』の篠原合戦で活躍した源氏の武者　　天美北７

近鉄電車が河内天美駅を出て、大和川へ向かう途中、左側線路沿いに城連寺・池内墓地 (天美北７丁目) が見えます。もともと、その東側を西除川が宝永元年 (1704) まで北に向かって流れていました。墓地中央に迎地蔵堂がありますが、その手前側に「十世孫手束太郎 源 光盛」と正面に刻んだ墓石が祀られています。南面に「羽富喜右衛門重清」、北面に「十八世孫手束寿仙範光」、裏面には江戸時代末期の嘉永２年 (1849) 秋に、池内村 (天美東) の手束文治郎らが建立したことを記しています。

この墓碑に関連して、河内天美駅すぐの線路沿いに浄土真宗本願寺派の吉井山敬恩寺 (天美東８丁目) がありますが、同寺に『手束氏系図』が蔵されています。江戸時代の元和４年 (1618) に書かれたものを、文治郎が嘉永２年に手を加えたものです。

同系図によると、手束氏の先祖は平安時代初期の９世紀初めごろ、河内国丹北郡善正寺村に住んでいた羽富喜右衛門重清としています。善正寺村とは、正式な行政村ではありません。ただ、善正寺の名から、現在、善正寺 (真宗大谷派) は天美我堂にありますが、もともとは天美北の城連寺村にあり、のち砂村 (天美西の油上・芝) に移りましたので、池内地域を含む天美の地にあったとされたのでしょう。

系図を追うと、重清から 360 年ほど経た平安時代末期に、羽富治左衛門重朝が記されています。重朝は木曽 (長野県) の源義仲方の武者とありますが、病いのため池内村で養生していました。その後、重朝のあとを手束太郎源光盛が継いでいます。

手束太郎は、軍記物の『平家物語』に手塚太郎と出てくる人物です。諏訪(長野県)の神官金刺氏の出身で、源義仲に従っていました。

『平家物語』によると、寿永2年(1183)、義仲は木曽から京都へ攻めこむため、片山津温泉近くの篠原(石川県)で平氏と合戦をまじえました。源氏軍の優勢のなか、平氏軍の斎藤実盛は1人奮闘したものの、「信濃国の住人手塚太郎金刺光盛」と名のりをあげた太郎にその頸をきられたのでした。

しかし、翌寿永3年(1184)、太郎は義仲と共に近江の粟津(滋賀県大津市)で討死することになります。

ところが、系図では太郎は死んだことにはなっていません。義仲の死後も、太郎は樋口次郎兼光(兼光は、三宅の樋口善左衛門家の先祖とも伝えています)に従って戦場におもむいています。その後、太郎は病気となったことから、重朝を頼って池内村に身を寄せたと伝えています。そして、重朝に請われて羽富家の家督を継いで重清10世孫と称し、手束家が興るのです。

手束氏は江戸時代になって、源平の篠原合戦の勇者、手束太郎源光盛を先祖の1人として系図に特筆すると共に、墓碑を建立して家の誇りとしたのでした。

手束太郎源光盛供養塔

91 油上の施福寺と薬師信仰

古砂庵・観音堂廃寺の変遷から砂村薬師へ　天美西３

現在の天美西１～８丁目あたりは、江戸時代、河内国丹北郡油上村でした。旧集落が形成されている天美西３丁目の油上公民館の北側には、施福寺が建っています。

施福寺は、東本願寺を本山とする真宗大谷派です。寺伝によると室町時代に道芳 (天文 22 年－ 1553 年没) が古砂庵と称する庵を開いたのが興りとされています。油上は江戸時代前期までは隣りの芝と分かれるまで砂村とよばれていました。施福寺の山号は古砂山と号します。天美小学校の西側には、古砂の小字名も見られます。

施福寺はもともと、寺名からも西国三十三ヶ所霊場である和泉の槇尾山施福寺と同じく、真言宗であったと思われます。江戸時代初期までには、浄土真宗に改宗したようです。本山の東本願寺が末寺へ免許下付した『申物帳』とよぶ記録によると、施福寺に対して

㈠寛文３年 (1663) ４月 16 日に「河州丹北郡由上村惣道場施福寺ト御免」として「木佛寺号」、㈡同日に「御開山様」、㈢同年５月２日に香炉台・燭台・花立てを置く「前卓」、㈣同年７月２日に「宣如様」、㈤寛文４年７月 26 日に「太子七高祖」

が与えられました。江戸時代前半に寺号や本尊の阿弥陀如来像、宗祖親鸞聖人 (御開山様) 絵像、東本願寺 13 世の宣如上人絵像、聖徳太子や七高祖絵像などが下され、寺観が整っていったのです。

施福寺山門横に薬師・地蔵堂が建っていますが、堂内には薬師如来像を中心に日光菩薩・月光菩薩像、四天王 (多聞天・広目天・持国天・増長天) や十二支の獣を頭につけた十二神将などが祀られて

います。仏像は、平安時代後期以降、現在の大和川左岸から今池水みらいセンターの東側にあったとされる古寺のものと伝えられています。同地には、薬師堂・観音堂・堂の前などの小字名が残り、平安時代後期から鎌倉時代後期の大量の軒丸瓦や軒平瓦が検出されています。字名を採って観音堂廃寺と命名されています。

ところが、江戸時代初めの慶長20年(1615)の大坂夏の陣で、古寺も焼失し、以後、廃寺となったようです。このため、持ち出された仏像を施福寺に移し、薬師堂を建立したといわれています。

油上村では薬師信仰が厚く、延宝7年(1679)に発刊された『河内鑑名所記』に「油上村の薬師、砂村の薬師とも云石仏也、御長一尺三寸」と記されています。40cmほどの石製薬師如来が有名でした。現在、堂に祀られている薬師如来は木造ですが、像高はほぼ石仏と同じです。施福寺本堂前には、享保12年(1727) 3月8日に建てられた「薬師如来堂前常夜燈」も現存しています。

近代に入っても、油上では母乳がよく出るように米五合を薬師如来に供え、翌日はそのお下がりをお粥にして食した風習がありました。反対に、母乳を止めたい時は、しぼり母乳を供えて祈願すればよいと伝えられています。

施福寺

92 芝村に創建された安楽寺

砂村に受け継がれる真宗大谷派　　天美西３

天美西３丁目の芝公民館に接して、安楽寺が建っています。東本願寺を本山とする真宗大谷派です。江戸時代前半の延宝７年(1679)、先勝によって開基されました。

江戸時代前半ごろまで、いまの油上・芝地区の天美西１～８丁目あたりは河内国丹北郡砂村とよばれていました。やがて、砂村は油上村と芝村に分かれていきました。東本願寺の記録に、寛文３年(1663) ４月、「由上村惣道場施福寺」とありますので、寛文３年までには、油上村の名と真宗大谷派の施福寺が存在していたことがわかります。しかし、この頃、芝村には寺院がまだ無かったようです。

安楽寺本堂に、本尊の阿弥陀如来像が祀られていますが、その隣りに宗祖親鸞聖人絵像が掛けられています。寺には、絵像をおさめた木箱が残されており、その箱書に「御開山様　貞享二年六月十四日　善正寺下　河州砂村惣道場安楽寺」とあります。貞享２年 (1685) ６月 14 日に安楽寺に下付されたものです。もと砂村にあり、我堂に移っていた善正寺が安楽寺の創建に関わっていたようです。

この時期、すでに油上村が成立していましたが、芝では、箱書からも砂村が依然として使われていたことがわかります。安楽寺では、延宝７年に東本願寺 16 世一如上人の絵像も下されています。一如は元禄 13 年 (1700) に亡くなりますが、ここにも「一如上人　河刕砂村　惣道場安楽寺」と裏書があり、元禄前後でも砂村が見られます。

旧本堂は、元文５年 (1740) ２月に再建されていました。それが、明治 38 年 (1905) や昭和 22 年 (1947) に屋根の修理などが行われ、

昭和 61 年 (1986)11 月に現本堂が新築されたのです。この時、山号がなかったことから、「芝宝山」と名づけられました。

本堂に喚鐘が吊されています。池の間とよぶ表面に「河内丹北郡芝村　安楽寺」「天明八年八月」「願主秀意」とあり、別の面にも「干時天保三壬辰四月」「再寄付之」「伊兵治　元右衛門」と刻されています。天明８年 (1788) につくられた鐘が、天保３年 (1832) に再鋳されたのです。天明期では、砂村は使われず、芝村とあります。

境内の南西隅に９基の自然石が祀られています。いずれも、寺草創期ごろの墓石です。最も古いものは、延宝８年 (1680) に亡くなった「釋尼妙清」墓です。ついで、元禄２年 (1689) ７月 17 日の「釋浄意」墓をはじめ、元禄３年、９年、12 年、14 年と元禄年間の年号を持っています。自然の青石であることも特徴的です。

明治時代に入って、安楽寺 21 代の砂本先照は文化８年 (1811) より明治 11 年 (1878) までの寺の略記と共に、過去帳を残しています。また、先照は寺子屋で教鞭をとった後、明治８年 (1875) ９月には、天美小学校の教員ともなり、明治 34 年 (1901)10 月までの 26 年間、ついで三宅小学校でも１年 11 ヵ月、教育をになったのでした。

安楽寺

93 阿麻美許曽神社と渡来人

天美の地名の由来となった氏神社　　矢田７

河内天美駅を出た近鉄電車が大和川を越える手前、西側を見るとうっそうとした森が目に入ります。それが松原六社参りの１つ、阿麻美許曽神社です。同社は下高野街道に面し、鎮座地は市境の大阪市東住吉区矢田ですが、松原市天美地区の城連寺・油上・芝・池内の氏神です。天美という地名も阿麻美許曽に由来すると思われます。

「許曽」とは珍しいよび名です。その語源は、朝鮮半島の古代国家新羅の言葉からきたようです。「許曽」は新羅で祭祀や神社の杜を意味します。新羅神話によると、神社の起源は、新羅の初代王赫居世を祀る祖神廟からおこったと伝えています。赫が名で、居世は治世をさす尊称です。この居世がなまって「許曽」となったといわれています。

「許曽」名をもつ神社は、全国に百数十社を数えます。各社は朝鮮半島から来た渡来人が、自分たちの祖先を祀って創祀したものが多いと考えられます。阿麻美許曽神社は、延喜式内社で、社伝によると平安時代初期の大同年間 (806~809) の創建と伝えていますが、その由緒はもっと古いでしょう。

７～８世紀ごろ、天美地区は河内国丹比郡依羅郷とよばれ、依羅連という氏族の居住地と想定されます。依羅連は、『新撰姓氏録』(９世紀初頭成立の氏族名簿) によると、「その祖先は、(朝鮮半島の) 百済の国人で素禰志夜麻美君である」と記しています。

つまり、依羅連は朝鮮半島からやってきた渡来系氏族でした。同氏の祖先とされる素禰志夜麻美君の「夜麻美」がなまって「阿麻美」となり、「天見」や現在の「天美」に転化したと推察されます。元来、

依羅連の祀った氏神が阿麻美許曽神社の創祀と考えられます。

同社は素盞嗚命を主神とします。一説には、この神は、飛鳥時代の斉明天皇２年 (656)、新羅の牛頭山から京都祇園の八坂神社に移されていましたので、牛頭天王ともよびます。

境内には、明治初年まで天見山の山号を持つ神宮寺がありました。拝殿前の狛犬台石に天見山とあります。廃仏毀釈で寺は廃されましたが、山門は出入口となっており、神仏習合の景観がしのばれます。

社務所の前、手洗舎の東側には「行基菩薩安住之地」の石碑が建っています。天見山宮寺に奈良時代の僧、行基が居住していたという伝承が江戸時代ごろからあります。行基は、百済系渡来人の高志氏 (堺市西区家原寺が本貫地) の出身であること。さらに、行基の師僧である道昭が天美のすぐ北東の丹比郡瓜破 (大阪市平野区) の人で、百済系渡来人の船氏の出身であることから、百済系渡来人の依羅連と結びついたのでしょうか。

いまも同社西側の大和川に架かる橋を行基大橋とよぶのも、こうした行基伝承が残るからです。行基は、『行基年譜』によれば松原近辺に狭山池院 (大阪狭山市) や石原布施屋 (堺市) をつくり、布教や社会事業を広めました。

阿麻美許曽神社

94 安明寺の創建

城連寺の村名となった南朝和田氏の菩提寺　　天美北５

大和川左岸に沿って細長く城連寺の集落が形成されています。いまでは、天美北という住居表示に変わっていますが、この城連寺の地名は、14 世紀後半の南北朝内乱期につけられたといわれています。

後醍醐天皇の南朝に属していた楠木氏の一族であった和田孫三郎正綱は、当時、富田荘とよばれていた天美の地に邸をかまえていました。 元中元年 (1384)、その和田氏の家臣であった城連寺左衛門安明が富田荘に陣屋を置くようになりました。現在、城連寺集落の南方にあたる阪南大学の北側に「城堀」の小字名が見られます。

安明は翌元中２年 (1385) に出家し、主君の和田氏の守本尊である聖観音を本尊として、和田氏を弔い、自らの名から菩提寺の安明寺を建立したのです。これ以後、富田荘は城連寺安明の姓をとって、城連寺と村名を変えたと伝えられています。ただ、富田の地名は、その後も旧西除川筋にできた富田新田などとして使われ続けました。

創建当初、安明寺は天美北４丁目のいまの大和川河川敷の大和川西運動広場付近にありました。江戸時代に入って、慶長 20 年 (1615) の大坂夏の陣で本尊の聖観音が破壊されるという被害にあっています。元和７年 (1621) に紀州 (和歌山県) の仏師によって、もとの姿に修復され、その胎内にくだけた破片を納めたといいます。

さらに、宝永元年 (1704) に大和川が現在の流路に付け替えられたため、安明寺の境内はその川床となりました。このため、いまの近鉄電車の西側、小字松本とよばれる下高野橋の南側に代替地を与えられました。本堂の再建は困難をきわめましたが、宝永８年(1711)

に近くの阿麻美許曽神社境内にあった神宮寺僧の春良が堂宇を完成させました。宇治(京都府)の万福寺が本山の、黄檗宗に属したのです。

しかし、享保元年(1716)の大水害や明和元年(1764)の火災などにより、その後、無住状態になったことから、嘉永年間(1848～53)、城連寺村の檀那寺である最勝寺境内(真宗大谷派、天美北5丁目)に小堂を設けて移転し、同寺のもとに置かれたのです。

この時、最勝寺住職であった恵学が移転に尽力しました。恵学は、幕末、九州・日田(大分県)の私塾である咸宜園に京坂ではじめて遊学した人でした。恵学は、天保7年(1836)に息子の大恵をはじめ、安養寺(阿保)の大芸、願久寺(三宅)の静雄、善長寺(三宅)の大成を、翌天保8年に敬恩寺(池内)の宝樹と円成寺(高木)の諦秀を堺にできていた咸宜園に入門させています。

安明寺は明治時代以後、和田氏の子孫で同寺を守護してきた城連寺村庄屋の長谷川家の私寺として、いまも祀られています。現在、最勝寺山門の北側に並んで、楠木・和田氏の菊水の紋を刻んだ墓股を持つ門が建ち、参道ごしに宝形造の本堂や長谷川家の墓石が見られます。本堂内には、後醍醐天皇や楠木正成などの位牌も安置されています。

安明寺

95 最勝寺が勤めた城連寺村門徒

善正寺と関わった真宗大谷派　　天美北５

天美北５丁目に、真宗大谷派の最勝寺が建っています。江戸時代の河内国丹北郡城連寺村です。この寺地には、もともと戦国時代の明応年間 (1492 ～ 1501) に、真言宗から浄土真宗に改宗した機会に摂津国住吉郡の平野 (大阪市) から移ってきた金剛乗院がありました。

真言宗だった金剛乗院は、江戸時代初頭までには善正寺と改め、東本願寺を創立した本願寺 12 世の教如の教化を受けて真宗大谷派に属したのです。その折、善正寺には順欽と順恵という２人の僧侶が仕えていました。しかし、順欽は元和２年 (1616) に城連寺村を出て、いまの天美西の砂村 (油上・芝地区) に新たに道場を設けました。その際、善正寺に教如から下付されていた文禄２年 (1593) の 11 世「顕如上人真影」や慶長５年 (1600) の宗祖「本願寺親鸞聖人御影」なども移したことから、２ヵ寺の善正寺が並存するようになりました。

一方、城連寺村に残った順恵は、もとの善正寺の住持 (住職) になりました。元和３年 (1617) に本堂が火災にあいますが、元和６年 (1620) には再建されました。寛永 12 年 (1635)、砂村に移っていた善正寺と協議し、城連寺村の善正寺は本山の東本願寺から本尊の阿弥陀如来像を与えられ、最勝寺と改称しました。最勝寺の名は、近くの阿麻美許曽神社に接して最勝寺と称する庵があり、同庵が廃寺となっていたので、地元ゆかりの寺号を付けたと伝わっています。

ところが、それも束の間、慶安年間 (1648 ～ 52) に無住となったことから、善正寺の住持が最勝寺を兼帯するようになり、城連寺門徒のお勤めもしたのでした。この頃、善正寺は砂村から現在の我堂

村(天美我堂)に移っており(寛永18年)、いまも善正寺の『過去帳』には、城連寺村や砂村の人々の名も記されています。

城連寺村には、元文元年(1736) 8月以降の明細帳が現存しています。明和8年(1771)正月の明細帳では、最勝寺は「境内竪拾六間 横拾四間」「本堂桁行五間 梁行三間 茅葺」とあり、瓦屋根ではありません。その上、いぜんとして我堂村の善正寺が関わっていた表記も見られます。

しかし、この頃には最勝寺看坊(住職)も寺に戻り、時の恵浄や城連寺村門徒が善正寺との結びつきから離れようとし、安永3年(1774) 3月の我堂村門徒との交渉の文書も残っています。また、いまも最勝寺本堂の軒先に架かる喚鐘には、「寛政四壬子年七月廿日 河内城連寺邨 最勝寺 常什物慧浄御代」と刻んでいます。慧(恵)浄の寛政4年(1792)には、寺観も整っていったのでしょう。

現在の本堂は、嘉永2年(1849)、恵学が住職の時に建立されたものです。恵学は本堂再建の前にも、東本願寺20世達如より、天保9年(1838)に親鸞聖人の絵像を下付されています。また、天保7年(1836)には檀家の『永代経法名記録』も始めた僧として、寺の隆盛に尽くしました。

最勝寺

96 村領を分断した新大和川

収穫前の麦畑をつぶされ水害で苦しんだ城連寺村　　天美北４

江戸時代前半、柏原から北流して淀川に合流していた大和川が松原方面に付替えられることになりました。このため、市域の若林・大堀・別所・三宅・城連寺（じょうれんじ）・油上（ゆかみ）・芝の村々では田畑を失い、水害の恐れのあることから、改流に反対しました。しかし、元禄（げんろく）17 年(1704) ２月後半、柏原から堺浦まで延長 14km、幅 180m の工事がスタートし、７ヵ月半後の同年 (宝永（ほうえい）元年)10 月 12 日に完成するという超スピードぶりでした。

工事は、川辺村（かわなべ）(大阪市平野区) を境に川上は江戸幕府、川下は姫路（ひめじ）藩 (兵庫県) の本多忠国（ほんだただくに）が分担する予定でした。ところが、３月に忠国が急死したため、新たに岸和田藩 (大阪府) の岡部長泰（おかべながやす）が川辺村領から城連寺村領 (天美北) を、三田（さんだ）藩 (兵庫県) の九鬼隆方（くきたかかた）が城連寺村領から庭井（にわい）村領 (大阪市住吉区) を担当することになったのです。

工事にかかった費用は、落堀川（おちぼりがわ）の新設や西除川（にしよけがわ）の付替えも含めて７万 7409 両。現在のお金に換算すると、140 億円にもなります。また、工事に従事した人数は、延べ 245 万人。近くの村々からもたくさんかり出され、毎日およそ１万人の人々が関わりました。

城連寺村に残る宝永元年の文書には、農民の窮状を次のように記しています。

「同村では、４月 26 日から工事が始まりましたので、農民は育てていた麦 34 町５反のうち、大急ぎで実っていた麦５町を刈り入れました。青麦も刈りましたが、まだ未熟な麦畑が人足足場や堤防・掘土場となることから、農民は５月６日には全ての刈り取りが終わ

るので、それまで工事を待ってほしいと役人に訴えました。しかし、役人はこの願いを聞き入れず工事を進めましたので、残りの 10 町歩余りの麦畑が堤の下敷きになったのです」

城連寺村では、村域の 66%もの田畑がつぶされました。その上、工事が完成した 10 月には南から流れてきた水があふれ、洪水となりました。城連寺村はその後も、毎年のように水害に見舞われたのです。

改流の結果、城連寺村の北端は大和川で分断され、大阪市東住吉区側の右岸下を走っていた旧 JR 阪和貨物線を境として飛び地のように残りました。近鉄南大阪線の大和川橋梁北側、矢田４号踏切から堤を東へ 1 km 余りいった地域までいまも松原市域です。反対に、大阪市が大和川を越えて松原側に複雑に組い込んでいますが、これは 300 年以上前の村の境界がそのまま現市境となったからです。

西除川もいまでこそ天美南の天美中央霊園前の高木橋付近から西流していますが、もともとは北流していました。ところが、新大和川が付け替えられたことで、北へ水が流れなくなったので、いまのように西流させ、浅香（あさか）(堺市) で新大和川に合流させたものです。この結果、城連寺村などには水がこなくなり、以後、耕作条件が非常に悪くなったのでした。

大和川

97 天美車庫に残る大正期煉瓦建物

大正１２年、大阪鉄道に建設　天美車庫前駅の誕生　　天美南３

大正７年 (1918) ６月 22 日、近鉄南大阪線の前身となる大阪鉄道道明寺ー大阪天王寺 (現大阪阿部野橋) 間に鉄道敷設の免許状が下付されました。４年後の大正 11 年 (1922) ３月 31 日、道明寺ー布忍(ぬのせ)間の線路が完成し、同年４月 18 日に旅客輸送が開始されたのです。松原に、初めて電車が通って河内松原駅と布忍駅が設けられました。

翌大正 12 年 (1923) ３月 11 日には、天美車庫が新設されました。そして同月 23 日に、これまで電車の走っていなかった布忍ー大阪天王寺間の線路もつながったのです。間もなく、４月 13 日に旅客輸送が始まり、ここに道明寺ー大阪天王寺間全線が結ばれました。

現在の河内天美駅は、車庫に西接して、大正 12 年に開業するのですが、当時の駅名は天美車庫前でした。河内天美駅となるのは、昭和８年 (1933) ４月１日のことです。『大鉄全史』(佐竹三吾監修、1952 年、近畿日本鉄道) によると、車庫は久保田組の竣工で、敷地総面積 8250 坪。鉄筋コンクリート造り、平屋建てで鉄板葺(ぶ)き五棟の他、鍛(たん)工場、機械工場、木工場、電工場、倉庫、守衛詰所など各１棟が設けられました。昭和７年 (1932) ８月、車庫の一部が焼失しましたが、翌８年１月、増改築を行っています。天美車庫は建設から 90 年以上がたち、敷設時の様子とは変わっていますが、大正期の赤煉瓦(れんが)づくりの倉庫がいまも１棟残っています。

平屋の煉瓦倉庫や煉瓦は、屋根までの高さはほぼ７m60cm、煉瓦の寸法はほぼ 230mm × 110mm × 60mm です。現在の煉瓦は、その後、大正 14 年 (1925) に日本標準規格 (JES) で決められた

210mm × 100mm × 60mm が使われています。

次に、煉瓦の積み方ですが、１つの列は煉瓦の長い方の面を見えるように積む長手積(ながてづ)み、その上の列は小口(こぐち)が見えるように積む小口積みとし、そして、その上の列はまた長手積みと並べ重ねています。こうした積み方を「イギリス積み」とよび、煉瓦建物では、一般的に採用される組積法です。

ふつう、明治期の煉瓦建物は意匠を凝らしたものが多いのに対し、大正期のものはシンプルなものが多いといわれています。天美車庫の煉瓦建物も全体的にはシンプルな外観ですが、それでも外面に壁柱を表現するなど、個性的なデザイン性も見られるのです。

天美車庫が出来た６ヵ月後の９月１日、関東大震災が起きました。その結果、煉瓦建物の耐震面での欠陥が露呈し、翌 13 年の市街地建築物法施行規則改正で、煉瓦建物は減っていったのでした。

ちなみに、河内天美駅の隣の布忍駅上りホームのトイレ前に、屋根を支える柱として、草創期の大正 12 年に使われていたアメリカ合衆国テネシー(TENNESSEE) 社などのレールが利用されています。市域では天美車庫煉瓦建物と共に、開通時の大阪鉄道のモニュメントとなっています。

天美車庫煉瓦建物　※非公開です

98 田坐神社と田井城

条里制にいきづく集落・農地・氏神　　田井城５

市民の文化・スポーツのメインゾーンとなっている文化会館・中央公園・図書館・体育館・プールなどは田井城につくられています。

田井城は、律令制の土地区画である条里制遺構がいまでも残っていることで有名です。農地の畔や道路区画、あるいはため池の１辺が約 650m のほぼ正方形をなすものが見られます。これは、条里制の１里の１辺が約 648m であることとほぼ一致しています。条里制が整然と存在していたということは、奈良時代には田井城に計画的な集落と農地が土地割りされていたことを想定させます。

この集落の中心に鎮座している神社が延喜式内社の田坐神社です。『延喜式』が編集された平安時代初期、田坐神社は、三宅の酒屋神社や天美地区の氏神である阿麻美許曽神社と同じく、官社として、国家によって幣帛を授かっていました。現社地は、田井城５丁目で、田井城の氏神です。境内に西接して真宗大谷派の陽雲寺が建っています。

同社の祭神についてははっきりしません。伝えるところによれば、八幡大神や依羅宿禰、あるいは呉織・漢織の織女を祀るといわれています。とくに、４世紀後半の 15 代応神天皇のころ、中国の呉の国から呉織・漢織が田井城に来て、わが国で初めて絹織りを始めたので、同社に織女が祀られたという伝承さえあります。

江戸時代後半、各社を調査した伴信友はその著『渡会氏神名帳考証』の中で、祭神を稲霊豊宇気姫ではないかと記しています。また、信友は天武 10 年 (681) ４月に「連」の姓を賜った田井直吉麻呂がいることから、田井氏の奉斎する神社ではないかとも推測しています。

田坐は、いまでは「タザ」とよんでいますが、古記にあるように「タ井」とよむのが正しいと考えられます。田井城の東北約6kmのところに、八尾市田井中があります。奈良時代の郷名を記した『倭名抄』に、河内国志紀郡田井郷があることからも推察されそうです。

田井城付近は、平安時代後期に荘園化して田井荘とよばれ、京都の石清水八幡宮領となりました。豪族の田井氏や田井荘の名が、今日の田井城の地名の由来となったと考えることもできます。

田坐神については、『日本三代実録』の貞観4年(862) 4月条に「无位田坐神に従五位下を授く」とあり、同年5月条にも「田坐神を官社に列す」と記されています。同社は明治41年(1908) 3月、上田7丁目の柴籬神社に合祀されましたが(いまも柴籬神社本殿西側に「式内田坐神社」の石標と祠が遺存)、昭和60年(1985) 4月に遷座祭が行われ、田坐神社は再び旧社地に祀られています。

平成9年(1997) 9月、本殿新築にともない境内も整備されました。拝殿には、大和王権の重臣として名高い竹内宿禰が生まれたばかりの応神天皇を抱く大絵馬も掲げられています。境内には、樹齢100年以上と推定されるクスやクロガネモチ・イヌマキが見られ、鎮守の杜を形づくっています。

田坐神社

99 陽雲寺と10世法栄の尽力

天保12年の棟札が語る田井城の真宗寺院　　田井城5

田井城5丁目の陽雲寺や田坐神社が建っている周辺は、江戸時代末期から明治時代ごろにかけて建てられた古い家々がいまも並んでいます。両寺社の東側は、元児童公園でしたが、以前は宮池でした。

真宗大谷派の陽雲寺は、田坐神社に西接しています。山号を天文山と称し、寺号の太陽の陽と雲から、宇宙を支配する天体現象に結びつけて、広大な仏教思想を広めようとする信仰が読みとれます。

陽雲寺には、来歴を知ることのできる長さ160cm、幅40cmの長大な棟札が本堂天井裏に残っています。表面・裏面に記された棟札は、江戸時代後半の天保12年(1841) 4月11日に書かれました。「河州丹北郡羽喰庄田井城村　陽雲寺十世法栄敬白　後住十一世法教廿八歳敬白　施主門徒中諸方助力」とあります。これは、本堂再建時に奉納されたもので、門徒が施主となり、陽雲寺10世法栄、11世法教の名で上棟されました。

棟札表面には、創建年として「舒明天皇十三年辛丑三月廿四日」の年号(641年)があり、飛鳥時代という古さに驚かされます。この時期は、仏教を保護した権力者の蘇我蝦夷・入鹿の全盛期で、その治世が舒明天皇でしたので、伝えとして、江戸時代から1200年前にさかのぼらせて仏法興隆を願ったのでしょうか。

田井城には、古くから神仏を祀る宮寺が建てられており、棟札には南無阿弥陀仏の他、梵天王・天照皇太神宮・春日大明神・住吉大明神・龍王などの名も見られます。隣りに田坐神社が鎮座しているのも、神仏習合のあらわれだと思われます。

棟札によれば、宮寺はのち天台宗陽雲寺となりましたが、やがて浄土真宗に改宗し、明応３年 (1494) に住職の快智が本願寺８世蓮如に帰依して弟子となったとあります。快智は、明応７年 (1498) ５月 28 日に本堂を完成させ、真宗陽雲寺の開基となりました。快智は天文 23 年 (1554) 正月に亡くなり、その一石五輪塔は歴代住職墓と共に、いまも本堂裏に祀られています。

そして、戦国時代から 340 年を経た天保 12 年、本堂の建て替えが計画され、再建されたのです。棟札裏面には、大工棟梁として市域三宅の松井伊三八や、工事に関わった現大阪市平野・羽曳野市誉田などの人々の他、普請奉行として地元・田井城の今田忠右衛門・庄兵衛や吉村平右衛門の名前も見られます。

陽雲寺には、山門横に建つ太鼓楼にも文化元年 (1804) ３月 20 日建立の棟札があり、法栄が奉納しています。法栄は、天保９年 (1838) に鋳物師である大坂の大谷相模家の藤原正次に梵鐘を鋳造させ、鐘楼も建立しています。

法栄は、天保 13 年 (1842)12 月に亡くなりました。あとを継いだのが法教で、１年前の本堂再建時である天保 12 年には 28 歳でした。

陽雲寺

100 福嶋・福島家の善宗寺

大阪から明治 29 年に田井城に移った日蓮宗　　田井城５

田井城５丁目の西ヶ池畔に建つ福嶋山善宗寺は日蓮宗のお寺です。同寺は、江戸時代後半の宝暦８年 (1758) ４月、日逞が摂津国西成郡西高津村に建立しました。現在の大阪市中央区谷町９丁目から少し谷町筋を北に上がった海宝寺の南側にあたります。

同寺は、もともと鎌倉時代に日蓮が開いた妙法寺 (山梨県南巨摩郡富士川町) の末寺でした。しかし、のち堺の日蓮宗の名刹である妙國寺 (堺区) と仏縁を結ぶようになりました。これを堺法縁とよびます。善宗寺の他にも、谷町９丁目の海宝寺やその西側の中央区中寺町には圓妙寺・常國寺・蓮光寺など、妙國寺の末寺が集中しています。市域では、若林の本了寺や東池寺も堺法縁です。

江戸時代以降、田井城では真宗大谷派の陽雲寺の檀家が多かったのですが、20 軒近い福嶋家や福島家の人々は日蓮宗の信徒でした。ただ、明治時代中ごろまで、田井城には日蓮宗寺院はありませんでした。このため、福嶋さんたちは圓妙寺から月参りや葬儀を出していました。それは、圓妙寺が妙國寺を頂点とする堺法縁の中でも、大阪府内の筆頭寺院であったことによるからです。

明治時代に入って、福嶋家などでは田井城に日蓮宗のお寺を建てることを希望するようになりました。そこで、圓妙寺を通して本山の妙國寺に願い出て、同じ法縁のうち、圓妙寺とは得度式の際に烏帽子親の関わりを持っていた善宗寺を福嶋家の土地であった現在地に移したのでした。時に明治 29 年 (1896) ９月のことです。当時の善宗寺住職は 10 世日基で、日基は常國寺の 19 世住職も兼ねていました。

常國寺は小説家の梶井基次郎の墓があることでも有名で、３月の命日には「檸檬忌」として、多くのファンが訪れています。

翌明治 30 年 (1897) ２月、善宗寺は発起本願人である福嶋家などの機縁により、山号はこれまで寿福山でしたが、いまの福嶋山に変えたのでした。現在、山門南側に建つ「南無妙法蓮華経」の題目石や本堂裏に祀られている江戸時代以降の墓石や石碑、および庫裏は 120 年前に大阪から牛車に引かれて運ばれてきたそうです。

毎年、大阪で行われる大相撲春場所の佐渡ヶ嶽部屋の宿舎が善宗寺に設けられています。琴欧洲親方や大関琴奨菊などの関取と市民との交流もあり、善宗寺は、いまではすっかり田井城の町に定着し、人々の信仰の中にいきづいています。

なお、河内のガイドブックである延宝７年 (1679) 刊の『河内鑑名所記』に４首の歌を載せる田井城村の平本重成が出た豪農の平本氏は、熱心な法華経信徒で、近くの日蓮宗徒の福島家と縁組を持っていました。田井城墓地 (田井城６丁目) の東南端、福島家墓所に並ぶ平本家墓所には、日蓮宗徒として文政４年 (1821)、天保５年 (1834)、嘉永７年 (1854) の「南無妙法連華経」や「妙法」の墓石や題目石などが見られます。

善宗寺

索　引

○神社

阿保神社 (1)　・・・・・・・・・・・・・・北東 6 ・31、北西 20
熱田神社 (11)　・・・・・・・・・・・・・・北東 26・28・30
阿麻美許曽神社 (93)・・・・・・・・・・・・北東 16、北西 20・38・41・42・48
厳島神社 (22)　・・・・・・・・・・・・・・北東 48
牛滝さん (49)　・・・・・・・・・・・・・・南東 50
大堀八幡神社 (14)　・・・・・・・・・・・・北東 32・43
我堂八幡宮 (84)　・・・・・・・・・・・・・北西 20
河合神社 (62)　・・・・・・・・・・・・・・南西 26
酒屋神社 (6)　・・・・・・・・・・・・・・北東 16・18、北西 48
柴籬神社 (26)　・・・・・・・・・・・・・・南東 4 ・ 7 ・14・20・21、南西 42、北西 20
十二社権現社 (34)　・・・・・・・・・・・・南東 20・23
高見神社 (70)　・・・・・・・・・・・・・・南西 42・44
田坐神社 (98)　・・・・・・・・・・・・・・北東 16、北西 48・50
出岡弁財天 (37)　・・・・・・・・・・・・・南東 26
丹南天満宮 (48)　・・・・・・・・・・・・・南東 48・50
布忍神社 (81)　・・・・・・・・・・・・・・北西 14・20
歯神社 (27)　・・・・・・・・・・・・・・南東 6
深居神社 (19)　・・・・・・・・・・・・・・北東 42
正井殿 (44)　・・・・・・・・・・・・・・南東 40
屯倉神社 (5)　・・・・・・・・・・・・・・北東 14・16・18、北西 20
若林神社 (16)　・・・・・・・・・・・・・・北東 36・43

○寺院

安養寺 (3)　・・・・・・・・・・・・・・北東 10・13、南西 24、北西 41
安明寺 (94)　・・・・・・・・・・・・・・北西 40
安楽寺 (92)　・・・・・・・・・・・・・・北西 36
栄久寺 (45)　・・・・・・・・・・・・・・北東 13、南東 42
円正寺 (42)　・・・・・・・・・・・・・・北東 13、南東 36・39・40
円成寺 (82)　・・・・・・・・・・・・・・北西 16・41
願久寺 (8)　・・・・・・・・・・・・・・北東 20、北西 41
願正寺 (31)　・・・・・・・・・・・・・・北東 13、南東 14・16・22・39
教専寺 (15)　・・・・・・・・・・・・・・北東 34
教通寺 (77)　・・・・・・・・・・・・・・南西 7 、北西 6
敬恩寺 (89)　・・・・・・・・・・・・・・北西 30・32・41
敬念寺 (72)　・・・・・・・・・・・・・・南西 39・44・46・49
最勝寺 (95)　・・・・・・・・・・・・・・北西 42
西徳寺 (4)　・・・・・・・・・・・・・・北東 11・12
西方寺 (7)　・・・・・・・・・・・・・・北東 16・18
西法寺 (25)　・・・・・・・・・・・・・・北東 13・54
西蓮寺／出岡 (39)　・・・・・・・・・・・南東 30・39
西蓮寺／東代 (56)　・・・・・・・・・・・南西 14
浄光寺 (36)　・・・・・・・・・・・・・・北東 12、南東 24・30、南西 30・32・36
正定寺 (20)　・・・・・・・・・・・・・・北東 44
浄信寺 (55)　・・・・・・・・・・・・・・南西 12
稱念寺 (61)　・・・・・・・・・・・・・・北東 10・13、南西 24
浄念寺 (88)　・・・・・・・・・・・・・・北西 26・28
称名寺 (53)　・・・・・・・・・・・・・・南西 8
浄林寺 (78)　・・・・・・・・・・・・・・北西 8
善長寺 (9)　・・・・・・・・・・・・・・北東 20・22、北西 41
善法寺 (33)　・・・・・・・・・・・・・・南東 18
善宗寺 (100)・・・・・・・・・・・・・・北西 52
善正寺 (85)　・・・・・・・・・・・・・・北西 22

施福寺 (91)　・・・・・・・・・・・・・・北西 34
泉福寺 (43)　・・・・・・・・・・・・・・南東 38
大師堂 (41)　・・・・・・・・・・・・・・南東 34
大林寺 (80)　・・・・・・・・・・・・・・北西 12
貞正寺 (87)　・・・・・・・・・・・・・・北西 26、28
頓随寺 (12)　・・・・・・・・・・・・・・北東 28
布忍寺／永興寺 (80)　・・・・・・・・・・北西 12
福應寺 (32)　・・・・・・・・・・・・・・北東 10・13、南東 16、南西 24
不退寺 (20)　・・・・・・・・・・・・・・北東 10・44、南西 24
法泉寺 (24)　・・・・・・・・・・・・・・北東 52
宝泉寺 (79)　・・・・・・・・・・・・・・北西 10
本了寺 (17)　・・・・・・・・・・・・・・北東 38、北西 52
陽雲寺 (99)　・・・・・・・・・・・・・・北東 13、北西 48・50・52
来迎寺 (46)　・・・・・・・・・・・・・・南東 24・44・46・52
立法寺 (18)　・・・・・・・・・・・・・・北東 40
良念寺 (35)　・・・・・・・・・・・・・・北東 10・13、南東 22、南西 24・31

○その他

阿保茶屋 (2・33・41) ・・・・・・・・・北東８、南東 18・34
天美車庫 (97)　・・・・・・・・・・・・・北西 46
伊藤利助 (65)　・・・・・・・・・・・・・北東 11・12、南東 25、南西 32
岩井富丸 (67)　・・・・・・・・・・・・・南西 36
岡遺跡 (38)　・・・・・・・・・・・・・・南東 28
河合遺跡 (57・58)　・・・・・・・・・・・南西 16・18
河内大塚山古墳 (29)　・・・・・・・・・・南東 10・12、北西 21
北山橘庵 (23)　・・・・・・・・・・・・・北東 50
行基一千歳塚 (21)　・・・・・・・・・・・北東 46
更池消防組碑 (54)　・・・・・・・・・・・南西 10
更池惣井戸 (76)　・・・・・・・・・・・・北西４
芝池経太郎 (66)　・・・・・・・・・・・・南西 34
尻池記念碑 (60)　・・・・・・・・・・・・南西 22
清堂遺跡 (63)　・・・・・・・・・・・・・南西 28
惣井戸 (68)　・・・・・・・・・・・・・・南西 38
高木遺跡 (83)　・・・・・・・・・・・・・北西 18
高見台楽 (71)　・・・・・・・・・・・・・南西 42・44
竹内街道 (40)　・・・・・・・・・・・・・南東 27・28・32・34・40
丹比柴籬宮 (26)　・・・・・・・・・・・・南東４・７・23・40、南西 29
立部古墳群 (30)　・・・・・・・・・・・・南東 12
田中家住宅／南新町 (51)　・・・・・・・・南西４
田中家住宅／高見の里 (69)　・・・・・・南西 40
稚児ヶ池 (2)　・・・・・・・・・・・・・北東８
津田式ケーボー号ポンプ (75)　・・・・・南西 52
妻屋秀員 (10)　・・・・・・・・・・・・・北東 24
手束太郎源光盛 (90)　・・・・・・・・・・北西 32
中野好松 (66)　・・・・・・・・・・・・・南西 34
中山家住宅 (13)　・・・・・・・・・・・・北東 30
西川家住宅 (86)　・・・・・・・・・・・・北西 24
「布忍橋」標石 (52) ・・・・・・・・・・・南西６
林明 (74)　・・・・・・・・・・・・・・・南西 50・53
一津屋古墳 (22)　・・・・・・・・・・・・北東 48、南東 12
一津屋城 (22)　・・・・・・・・・・・・・北東 48
樋野ヶ池窯 (28)　・・・・・・・・・・・・南東８
松川長右衛門 (50)　・・・・・・・・・・・北東 31、南東 52
王仁の聖堂址 (37)　・・・・・・・・・・・南東 26、南西 28

執筆　西田孝司（にしだ　たかし）

昭和 22 年、松原市上田生まれ。
関西大学大学院文学研究科日本史学修士課程修了。
主な著書に
『雄略天皇陵と近世史料』（末吉舎、平成３年）
『続天皇陵を発掘せよ』（三一書房、平成７年・共著）
『文久山陵図』（新人物往来社、平成 17 年・共著）
「河内大塚山古墳と陵墓参考地」（『松原市史』第２巻、平成 20 年）などがある。

協力者一覧　　北西コース

阿麻美許曽神社・安楽寺・円成寺・我堂八幡宮・教通寺・近鉄グループホールディングス㈱・敬恩寺・最勝寺・浄念庵・浄林寺・善正寺・善宗寺・施福寺・大林寺・田坐神社氏子会・多聞院・貞正寺・布忍神社・宝泉寺・陽雲寺・市田英介・三田昌孝・嶋田正廣・手束太郎・西川　宏・長谷川正禮・福永信雄・松田直子・保田紀元　（順不同・敬称略）

表紙…ぬのせ観音 (『河内鑑名所記』延宝７年・1679 年) より

松原歴史ウォーク　４北西コース

発行日　平成 27 年 10 月 31 日
執筆　西田　孝司
編集　松原市教育委員会
発行　松原市
大阪府松原市阿保１－１－１
☎ 072-334-1550
印刷　株式会社　地域文化財研究所